

2024年10月20日聖霊降臨後第22主日説教

イザヤ 53 章 4-12 節

ヘブル人への手紙 4 章 12-16 節

マルコによる福音書 10 章 35-45 節

本日の旧約日課はイザヤ書です。その中にある「苦難の僕」についての箇所です。この「苦難の僕」の部分は、52章13節から始まっていますが、大斎節などで読まれることが多い聖書箇所です。ことに大斎節に「十字架の道行き」の礼拝を行っている教会では、毎年繰り返し読む箇所といえるでしょう。その意味では、この部分は、教会生活の中で有名な聖書箇所、また「苦難の僕」は、有名人といえるかもしれません。

しかしながら、この「苦難の僕」が誰であるかを歴史的に明確にすることは困難です。そもそも、特定の人物を指しているかどうかは定かではありません。それゆえ、特定の人物ではなく苦しむ人々全体を指しているとも考えられます。ことにイスラエルあるいはユダヤ人という集団を指しているとも解釈されます。しかし逆に、この「苦難の僕」は、歴史的に特定することが難しいがゆえに、大切なことを示しているともいえるのです。

「苦難の僕」とは、端的に言えば、人々と主なる神様の両方に見捨てられた人です。そして、イザヤ書は、そのような人を通して、主なる神様とイスラエルと間の「執り成し」がなされる、罪の贖いがなされると語っています。このような主張は、『聖書（旧約）』の中でも特徴的です。主なる神様とイスラエルとの間の「執り成し」は、モーセのような存在、神殿祭儀、あるいは律法を守ること、それらを通して行われるのが通常であるからです。そのためか、ユダヤ教の歴史の中で、この「苦難の僕」が重要性を帯びることはあまりありませんでした。

この「苦難の僕」が、主なる神様とイスラエルとの間の「執り成し」あるいは「罪の贖い」であると語っていると述べましたが、それは「**彼が担ったのは私たちの病、彼が負ったのは私たちの痛みであった。**しかし、私たちは思っていた。彼は病に冒され、神に打たれて、苦しめられたのだと。彼は私たちの背きのために刺し貫かれ、私たちの過ちのために打ち砕かれた。彼が受けた懲らしめによって、私たちに平安が与えられ、彼が受けた打ち傷によって私たちは癒やされた。私たちは皆、羊の群れのようにさまよい、それぞれ自らの道に向かって行った。その私たちすべての過ちを、主は彼に負わせられた。」（イザヤ 53：4-6）とある通り、すべて「私たち」と表現されています。「私たち」という表現が何回も出てくるのです。「苦難の僕」が誰であるか特定できないと述べましたが、それがイスラエルという存在と無関係ではないことは確かです。しかし、それが直接、特定できるようにではなく、「私たち」とあえて表現されていることが重要なのです。この箇所が、『聖書』の言葉として、時間と空間を超えて響き続けるからです。

教会は、この「苦難の僕」の姿に重要性を見出しました。ここに描かれている事柄が、イエス様の出来事を理解しようとするときの助けとなったからです。もちろん、この箇所は、未来を予測するいわゆる予言として書かれたものではありません。それが書かれた時代において、主なる神様とイスラエルとの間に何が重要かを記したものです。しかし、その記述は、教会がイエス様を理解するうえでの大切なヒントとなったのです。ことに、「私たち」という表現に、イザヤ書が書かれて約500年を経た世界に生きている教会の人々は、自分たちの姿を見出したのです。

教会は、十字架で死なれたイエス様が復活されたという信仰から始まりました。その信仰は今も変わりません。しかし、その信仰は、何の前提もなく起こったわけではありません。イエス様の出来事を目撃し、『聖書』を学ぶことを通して、その信仰は始まりました。イエス様の復活を信じるという意味では、その信仰のあり方は、最初の頃の教会の人々と、現代のわたしたちと変わりませんが、そこに至るまでの『聖書』とのかかわりは、大きく異なります。最初の教会の人々にとって、イエス様を理解する助けとなる『聖書』は、「旧約」と「旧約続編」であったからです。しかし、そうであるがゆえに、本日のイザヤ書の箇所で、何度も繰り返される「私たち」という響きは、時間と空間を超えて、今日の「私たち」にも響くものです。

イザヤ書が書かれたと思われる時から約2500年、イエス様の出来事から約2000年、21世紀という時とその世界に生きている「私たち」の世界に、何の苦難もないのであれば、この「苦難の僕」の姿は、全く別の世界の事柄となったかもしれません。しかし、現代はそうではありません。より複雑になった苦難が次から次へと発生し、その解決の糸口さえ見つかりません。しかし、主なる神様が、時と空間を超えて、その解決のための糸口、ヒントをすでに与えてくださったことを、本日は『聖書』から確認して、希望を持ち続けたいと思います。

私たちはこの世界から苦難がなくなることを望み、祈ります。ことに、それが誰の苦難であっても、なくなることを望み、祈ることが大切です。しかし、残念ながら、どれほど望んでも苦難は存在します。「苦難の僕」の姿は、その苦難が存在する時、そのことを通して、主なる神様が、主なる神様とすべての人と間の、そしてすべての人と人との間のとりなしをなさろうとされていることを示します。そこに希望を持ちたいと思います。ことにイエス様の十字架の姿に、この世界の苦難は、イエス様の十字架というこの苦難一つで、もう充分であると示してくださっていることに希望を持ちたいと思います。そして、それでも起こってしまった苦難、ことに悲しい死、それがすべての終わりでないことをイエス様の復活が示してくださったことに、希望を持ちたいと思います。そこから、和解と平和の道が開かれることを、信じ続けたいと思います。